はしど

練馬区立橋戸小学校
学校だより　第５号
令和元年　９月　２日
校　長　青木　俊哉
http://www.hashido-e.nerima-tky.ed.jp/

☆学校教育目標　考える子・思いやりのある子・たくましい子

# 笑顔が一番

校　長　青　木　俊　哉

**「よい仲間と期待してくれた仲間のためにも、笑顔だけは崩したくなかった。」**

この夏、私が最も印象に残った言葉、高校野球の決勝で敗れた星稜高校のエース奥川選手が、閉会式後の取材で発した言葉です。

決勝は、履正社高校と星稜高校の対戦、ここでの選手たちの表情に注目し、観ていました。奥川選手が、“苦しい場面でも笑顔を見せたこと”の印象が強く、冒頭の言葉とつながりました。ベンチで見守る監督も決して険しい表情を見せることはなく、むしろ穏やかな表情で選手たちに指示を送り、励ましていたように見えました。ベンチから伝令が出るような場面でも、バッテリーを囲む守備陣の笑顔に癒された程です。高校生とはいえ頂点を目指す大会、スポーツは勝負事ですから、負けて悔しいのは当たり前ですが、それを超える清々しさを感じる決勝戦でした。中でも象徴的だったのが、星稜のエース奥川選手と履正社の主砲井上選手の対決です。５打席で、１本塁打、３三振という結果です。井上君のホームランを打った時のにこやかな笑顔はもちろんですが、三振した時にも、満足したような笑顔が見られました。常にフルスイング、相手投手と真っ向勝負できたことや素晴らしい投球に対する思いが、その表情から読み取れました。ライトの守備に向かう際にも、スタンドの応援に笑顔で応え、全力疾走する姿に好感がもてました。また、投げた奥川君も、逆転ホームランを打たれ悔しい場面のはずですが、苦笑いを浮かべながら、小さくキャッチャーに「ごめん！」と一言発した姿が印象的でした。

今大会は、この決勝戦に代表されるように、悔しさにうつむく姿や涙を流して迎えるゲームセットより、むしろお互いの頑張りを認め、讃え合い、笑顔で締めくくるゲームが多かったように感じました。全力を出し合う、持てる力の限りを出してぶつかり合う、そこへの満足感や充足感が、終わった後の笑顔につながっていたのではないでしょうか。当然のことながら、本番で全力を出せるということは、その裏付けとなる日頃の練習と当日を迎えるまでの努力があることは言うまでもありません。まさに、スポーツの原点を見た思いです。

この夏“笑顔”と言えばもう一人…。「スマイル・シンデレラ」こと女子プロゴルファーの渋野日向子選手、昨年プロテストに合格したばかりの２年目、２０歳の選手です。今年国内ツアーで２勝したとはいえ世界的には無名の彼女が、世界のメジャータイトルの一つである「全英女子オープン」において、初日から好スコアで回り、緊張感も半端なく大きい最終日の最終組、１ホールごとに順位が入れ替わる大接戦、厳しい展開の中を、“しかめっ面でなく笑顔”、リラックスした表情に強気で攻め抜き、最終ホールのバーディーでの優勝、見事というよりほかありません。帰国後の大騒ぎも頷ける、そんなプレーでした。渋野選手の“笑顔”は、悔しさや怒りを振り払うために意識して心がけている…と聞きます。家族の教えとも、師のアドバイスとも、様々伝えられますが、“笑うことのすばらしさ”“笑顔の力”を強く感じます。

かつて日本のスポーツを取り巻く社会には、「負けて笑うんじゃない。」「歯を食いしばって闘え。」的な風土があり、とくに負けた時にはそういった声や思いが強く出たことは事実ですし、バッシングを浴びた選手たちもいます。もちろん、その良さもわかりますが、一方“笑顔の良さや力”が認められ、スポーツに限らず、人と人、社会と社会の在り方や関わり方が変わるきっかけになったようにも感じます。

今日から２学期が始まります。“笑顔”をキーワードに、様々なことを前向きに受け止め、ポジティブに考え行動する、そんな取り組み方を意識してほしいと思います。仲間とともに、仲間と支え合い、共に手を携え…、そんな日々が過ごせることを願っています。これこそが、まさに“笑顔のなせる技”です。